# 風韻 第5号 目次


五十年の体験 …… 師範 宇治正夫 …… 1

先輩登場

〔その1〕先輩消息欄 …… 旧 1 藤井 茂 … 3
旧 5 西尾雄一 … 4
旧 9 福光家慶 … 4
旧 13 前田一二 … 4
新 2 諏訪秀行 … 5

〔その2〕リレー随筆
Ⅰ 謡とゴルフ …… 旧 3 岡本政治郎 … 6
Ⅱ 学生謡曲への郷愁 …… 旧 23 石田輝夫 … 8

〔その3〕随想「花と心」—風姿花伝より— …… 旧 12 伊藤欣二 … 10

走馬燈 …… 11
戸次威左武、段野治雄、近藤哲久、武田良弘
黒田昌吾、金子智一

▶昭和三十九年度風韻会活動総括

唐様とかく三代目 …… B 14 大林治郎 …… 19
学連コンクールを終えて …… E 13 黒田昌吾 …… 22
幹事長就任にあたって …… J 15 尾島洋三 …… 23
風韻会のあしあと …… 24
神戸大学風韻会名簿 …… 28
編集後記 …… 41


表紙題字は宇治師範筆

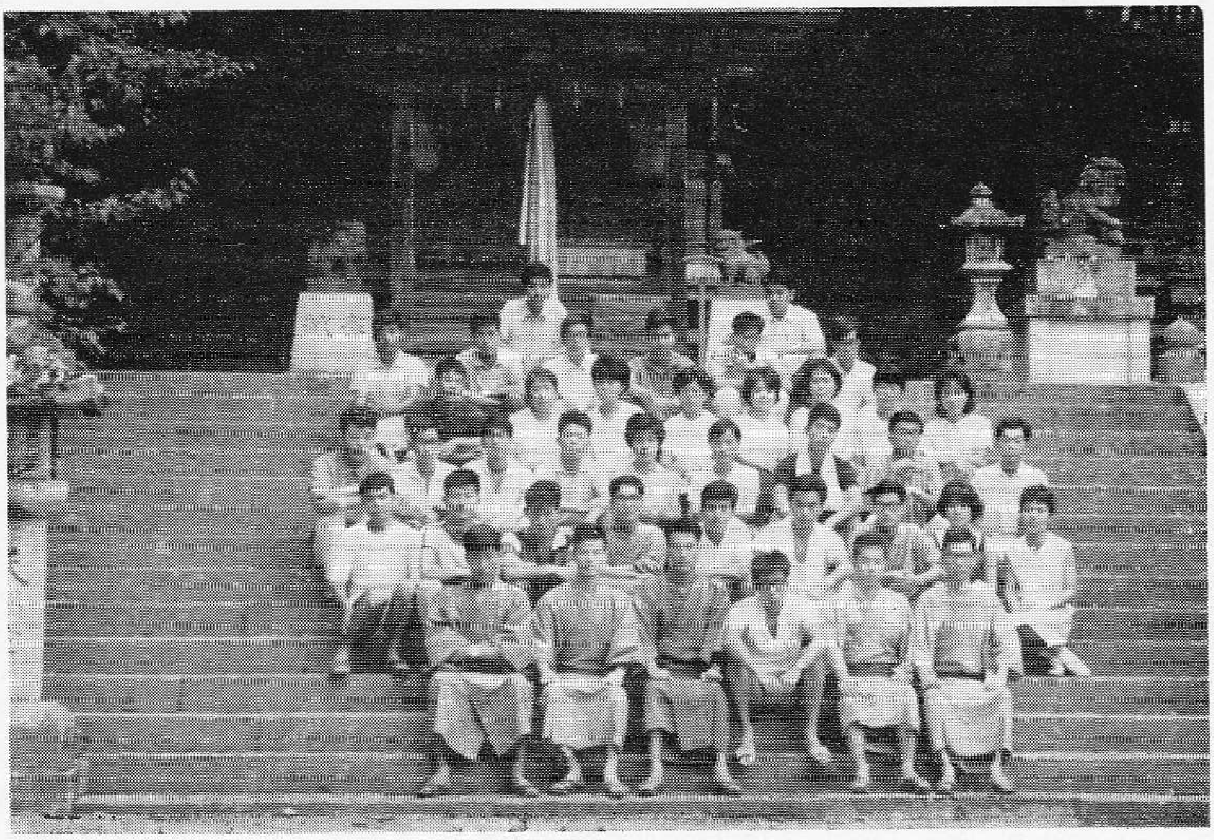
# 風韻

第 5 号

(1963年度)

神戸大学風韻会

12回生歓送謡会（1964年3月22日　於 学生集会所）



39 年 度 夏 期 合 宿
（1964年8月24日―8月31日　於 滋賀県海津天神社）

「百　萬」　一法楽の舞一　　宇治正夫師範
（昭和39年5月　於 大槻能楽堂）

# 五十年の体験（一）

師範　宇治・正夫

父子相伝、生まれた時から謡を耳にして居る家庭は別として、初めて謡を習う人は何も判らぬことであるから、坐り方から、声の出し方、節の末端に至るまで、悉く専門的に見れば悪いのは当然である。それを初めから一々直したりして、教える人の思うままにさせ様としても到底出来る事ではない。

歩きかけの子供がやっと立ち上がり、ヨチヨチと足を運びかけた時、その足の出し方はいけない、とかもっと高く上げて等と言う親は恐らくありますまい。エライ、エライとかウマイ、ウマイとか言って手を叩いたりハヤしてやったりする事に依って勇気が出て、段々と速く成長するものである。謡の稽古を始めた人も歩きかけの子供と同じことで、教える者は習う人の声に合わせて、少し水準の高い処へ引張り乍ら無邪気になるべく技巧を加えない様に謡わせ乍ら絶えず力づけ、勇気の出る様にしてやらねばならない。

然るに、その家族や近い人に節の上げ下げの判りかけた人があると、教えてやろうとか何とか言って、それはいけない、此所はこうだ、と少々おかしい様な的の外れた、極言すれば育成には有害無益な指導をする人が多いものである。本人にすれば、何も判らぬ所へ小言ばかり言われる為、厭になり面白くないから遂に中絶して終る人も出来る。私共能楽を生命とする者にとっては、また日本人の誇とする能楽道に第一歩を踏み入れた人を失うことは誠に嘆かわしい事と思うので、私の五十年の体験を少し宛かみしめてみて、皆様に相談的に話して見たいと思うのであります。

先ず、初めて謡をやる人を導く順序として

第一、姿勢、調息、発声の方法を教え、どんな謡でも骨組を造る心を以て初めて文句は一切禁物である。その人の持前の声なり力なりを良く理解し、少し宛それを引き伸ばす様に口移しで引張って行く。これを何回も繰返して居ると段々と自信がつき、声も大きく態度も立派になって来るものである。そして又、自信がつき過ぎてうぬぼれが出て来る様になった時、必要に応じてチョイ、チョイと強いことや苦いことを言って正して行く。然し、人によって或る時期には鼻持のならぬ程天狗になって苦々しく思う時でも見逃がし、聞き逃がさねばならぬ時と、たしなめる必要のある時とがあって、その判断を誤らぬことが教え上手というものであろうか。

（つづく）



# 先輩登場

神戸大学風韻会も三十余年の歴史を歩み、その間に多くの卒業生を送り出し、その伝統は先輩から後輩へと受継がれてきました。

しかし日頃の活動は現役が中心であるため、風韻会の成長を見守って下さっている先輩の存在を看過し勝ちである事を深く反省し、数ある先輩諸氏の社会の第一線での御活躍振りなどの近況、或いはその時々の随想を携えて毎号にわたってこの欄に御登場願うことになりました。

## その① 先輩消息欄

既報の如く本号から、当誌の内容の充実を目指して、「先輩消息欄」を新設する運びになりました。これは現役会員、卒業生会員間の連絡を一段と密にし、以て風韻会の一層の発展を期する為のものです。この意図を汲んで戴き、今後この欄のより一層の充実に御協力下さい。今回は多数の先輩から二十氏を無作為抽出の上寄稿をお願い致しましたが、以下に掲載する七氏の御協力を戴きました。なおその他に伊藤欣二先輩からも御回答がありましたが、これは随筆として掲載致しました。御了承下さい。

回答を願った項目は次の通り。なおその他にいいアイデアがありましたらお知らせ下さい。

一、家族構成
二、最近思うこと
三、後輩に一言
四、先輩間通信

昭和七年卒（旧・一）
藤井茂

一、妻　栄子
長男　隆（日本板硝子勤務）
次男　進（京都大学工学部機械科四年）

なお、長女和子は西川家に嫁し、目下東京に住んでいます。

二、大きくは世界の経済の帰趨、小さくはわが身の越し方。世界に伍して日本経済がいかに処すべきか、一年間の研究課題としたい。

わが身の越し方に悔はない。次第に老年に近づく現在、さらに悔なき生活を続けたい。謡も続けて行きたい。

三、先輩は後に続く者を信じ、後輩を托すわけで、その日に備えて今日の一日一日を充実させてほしい。学問にも謡曲にも。

四、「謡って三十年」といったのもすでに数年前のこと、謡も永く続けたものです。大学卒業の前の関西四校連盟で「百万」のシテを謡ったことを思い浮べなつかしんでいます。母校に職を奉じて以来三十三年、時に若い学生と一緒に謡って楽しんでいます。卒業生の一人一人を謡の友としえた身の幸を謝します。これからも続けて行きたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

昭和十一年卒業（旧・五）

## 西尾雄一

一、私　五十二才　西尾商店経営
妻　美代子　四十一才
長女　由美子　十九才　神戸女学院大英文科
長男　一男　十六才　兵庫高校一年
次女　和子　十三才　神戸女学院中一

二、人生の後半にさしかかり、今後益々健康第一、家族ぐるみの楽しみを持ちたい。

三、若い時は二度なし、自重しながら大いにやりたい事をやって下さい。

四、近頃ちょっと会っていません。

昭和十五年卒業（旧・九）

## 福光家慶

一、妻と娘との三人暮しで、最少規模の家庭ながら、それだけにそれぞれの気ままのきくゆとりはあって、よいといえばいえるわけでしょうか。

二、不況下とはいっても、庶民生活そのものはむしろ岩戸以来の太平ムードで、レジャー・ブームというのか、謡人口なども空前の膨膨ぶりのようですね。同好の者としてとまれ喜ばしいかぎりです。ことに若い人達のお稽古が殖えているらしいのを頼もしく思っています。

三、私自身は昭和九年にこの趣味に入ったので、もう三十年にもなるのですが、それにしてもこの道の上達の容易でないことを思うばかりです。もとより後輩諸君に一言などと口幅ったいことのいえたわけではないのですが、あえていわしていただきましょう。この道は奥行きも深ければ、幅も広いように思うのですね。そこで、のどの修練ももとより大切ですが、同時によいお能の鑑賞により目と耳でこの詩劇の心を味得することが、この道のかなり重要な修練方法であるとともに、この道をたしなむ者にのみ与えられた楽しい特権でもあるのではないでしょうか。一老兵の感慨です。

昭和十八年卒業（旧・十三）

## 前田一二

一、長女　（高校一年）



長男　（中学一年）
次女　（小学五年）

それぞれ健康に恵まれ、妻も元気でこれ以上望むところはありません。欲をいえば金にも恵まれたいものです。

二、謡曲は昭和十二年に始めましたが、戦争のため中断し、又、会社勤務になると時間の自由がききませんので一向に上手になりません。最近は風韻会の月並会にも顔を出し、このあたりで落着いてぼちぼち練習しようかと思っています。

三、総合大学になった為、部員も多くなったと聞いています。皆様に御願いしたい事は、

(イ) 月並会には出来る限り出席し、又、地謡にも積極的に出る様に努めていただきたい。

(ロ) 毎日少くとも十分間位は各自練習をしていただきたい。

以上の二点であります。

四、十三回謙山氏、十四回小杉氏の近況が知りたいものです。

昭和二十九年卒業（新・二）

## 諏訪秀行

一、学窓去ってはや十一年、妻をめとりて三年がすぎました。只今は奈良の学園まえ「寧楽京」の住人となり、新鮮な空気と静寂な環境の中でのんびりと暮しております。ボツボツオヤジにならねばと思いつつ……

二、会社では所謂「中堅」どころ。きびしい現実社会の荒波にもまれ、ファイト一杯張り切っております。多忙であればある程、この深淵な芸術の世界にいよいよ郷愁をおぼえ、この世界に浸っている時こそ、心身共に安息と浄化の極地に達することが出来、又新たなるファイトが湧いて来ます。

三、如何なる環境の下におかれようとも、他の一切の世事からはなれ、無念無想の佳境に引き入れてくれるものを持っていることは此の上なくすばらしいことです。ましてやそれが最高の芸術である事に大きな喜びと誇りを感ずることでしょう。皆さん、大いに張り切って続けて下さい。

四、数ある同輩の中で、特に四国在勤の大角君、遠く東北地方に在住の五十嵐君、四日市に在勤と思われる毛受君、その後如何お暮しかその消息が知りたいものですね。それぞれ良きオヤジとなり又社会の各方面で御活躍のことと思いますが……。

## 都留好子先生謝恩謡会

神戸大学の学舎統合の結果、姫路分校が廃止され、風韻会姫路支部も十年の足跡を残して発展解消した。

支部誕生以来十年の永きにわたって御指導頂いた都留先生に、少しでも私達の謝意を表わそうと、六月二十一日姫路の本城能楽堂に於て神大風韻会主催の下に謝恩謡会を開催した。当日は現役、先輩、好諷会有志など多数の参加により、素謡、仕舞、連吟の番組を盛会裡に終えた。会後のコンパの席上で、神大風韻会と好諷会が今後も交歓会などによって、旧交を暖めてゆくことを、全員が賛成した。長年の都留先生の御親切な御指導を感謝致しますと共に、今後の先生の御健康と御活躍を一同心からお祈り致します。

リレー随筆 その②

# 謡とゴルフ

昭和九年卒（旧・三）
岡本政治郎

暮も差迫った三十日突然「風韻」編集幹事から「リレー随筆」第一ランナー指名の通知を受取った。寝耳に水の抜打切捨御免、簡潔にして要を得た通知である。然し考えて見れば、私は風韻会が神戸大学に誕生した当初の在学生であり、従前から存在した鞍馬会が現在の宇治先生を迎えて風韻会に衣替えをすることを発起断行した青年将校層の学年に属していたこと、そしてその中核体を構成したとおぼしき連中が現在死亡し、或は四散して地域的に又精神的に稍疎遠の状態にあること、私が卒業以来芦屋、夙川と住所を変えず、時には顔も見せ、所在も明らかなので私に白羽の矢が向けられたのも別に不思議ではない。彼等当時の青年将校は鞍馬会に入会し謡曲を習い初めたが、従来の師匠との因縁も浅くとかくの評もあった。師匠の素謡一本の在り方に飽き足らなかったので、密議（?）を凝らし、在学先輩も賛同シンパとなって宇治先生を迎える準備を進めた。この際宇治先生は同じ能楽界に棲む者の守るべき仁義として、鞍馬会と前師匠との関係が、先生と無関係に学生自身の発意によって、清算された暁には引受けましょうとの停止条件で承諾し筋を通されたことは、勿論である。何故宇治先生を選ぶに到ったかの経緯は忘れたが、この間先生に紹介し何くれと学生の相談相手になったのは、能学界に出入りして雑用をしていた大学軍事教練のためにあった学内銃器庫の管理人であった野瀬虎一と言う我々学生と仲の良い謡好きの小さい「野瀬のオッサン」であった。卒業後も年賀状の遣り取りをしていたが、いつとは無しにとだえてしまってその後の消息は知らない。私は昭和二年神戸高商入学当初から鞍馬会に入会手ほどきを受け初めたが予科一年終了の春、父の死去に遇い一年間家業の手伝いをして再び学校に戻った。休学の時から別の師匠について個人教授を受け、校外稽古を中心に学校と双股稽古を続け、人の二倍の稽古を励んだが、前記の運動には直接には参加しなかった。回顧すれば、既に当時から三十年以上経過し中心人物の或る者は死亡し、私も歴史的には神戸大学風韻会の創設当初の大先輩に当るので冒頭の随筆第一ランナーに指名されても異議申立ても出来ないと観念したのである。既に鞍馬会の当時から他の関西の大学の同好団体との間に連合大会開催の機運が熟し我校の鞍馬会、大阪商大の民謡会、関西学院の観声会、関西大学の能学会との間に幹事校持回りで昭和六年六月には第三回関西学生連合謡曲大会を開催し、毎年春秋各一回の割合で継続催会している。宇治先生を迎えてからは



仕舞を習う者も急増し、時には社中の応援もあり夫人令嬢の参加もあって大変賑やかになった。会の名称も現在の風韻会と改称し、学内教授の内にも続々先生の教を受ける人達が現われ、記憶を辿って今その人の名を挙げれば、藤井茂、八木弘、白杉三郎、川上太郎、米花稔、丹羽康太郎、花戸龍蔵、柚木馨、生島遼一、古林喜楽等何れも錚々たる当時の、或はその後の教授ばかりである。またこの外にもあるかも知れないが一寸思い出せない。尤も藤井、米花教授あたりは学生時代から引続き稽古していた人達である。そして学生が大会を開催するときは必ず一、二番特別賛助出演を願って、会に花を添えて戴いたのであって、教壇によってではなく謡曲を通じて今日迄覚えて貰っている先生方もある。

これ丈熱心に謡を勉強した私共が卒業、就職、昭和十一年の病気による中絶以来全く謡曲から遠ざかって失った。全く関心が無い訳ではない。テレビを捻って演能があれば緊張した盛り上る囃子の調子に興奮を覚え終曲の後、謡本を取出して謡ってみるが、その出来の悪さに厭気して途中で止める程度には、今尚興味を持っている。

それにつけても思い合わすのが運動不足の会計士商売のため、健康上初めたゴルフのことである。謡は十八才から十年間習った。ゴルフは四十五才から十年間やっている。御多分に洩れず仕事に出る日より日曜の遊びに出掛ける日の方が家を出るのが早いとの妻の批判を背に聞き流して、三十分の近距離の芦屋ゴルフ場に出掛ける。雉子の声から鶯に移り次いで山ほととぎすから蟬しぐれと順次移り変る季節を緑の芝生に続く碧空に向って白球を追いながらコースを巡る内に、いつしか仕事の悩みも忘れ、時には百以上も叩いて未だにハンディ二十四の辺りを迂路ついている。

謡十年と謂うが、十年間で人並に謡えたと自負している。本当はそれからであって今日思えばただ節を謡っただけに過ぎないのであるが、それでも他の社中の人達よりは相当進歩が早かった様である。それに較べてゴルフ十年、ハンディ二十四は熱心な若い人なら一年間でとっくに追越している。この調子ではいつ迄たっても自分のゴルフは謡程度迄も届き相も無い。此頃は専らゴルフを初めた人に勧告する方に廻っている。矢張り熱い内に鍛えねば駄目だ。自分の様に緩るま湯的に過ごして来ては駄目だ。プロについてレッスンを受け最初の内に密度高く練習し右顧左眄することなく気違いになることだ。若人の場合この状態になり得たら速かな上達間違いない。然し中年過ぎては第一肉体が硬くなっている。運動神経の鈍化も避けられない。それに加えて受入精神も若い人程素直でなくなっている。だから上達の遅いのは当り前だが、何もプロになるのが目的でないのだから、基本線から外れさえしなければ迷わず我が道を歩いて練習する方が、ぐづぐづ迷って抜け切れないより、遙かに得策である。現にシングル近い人でも変な恰好でショットしている人もあるではないか、要するに最初一、二年間にみっちり自分のものにしてしまうことが賢明である、と所信を説いている。理想の本通りではない。しかし中年過ぎた者の上達実践法ならこの程度で満足せねばなるまい。もう少し年令を加えて悠々余生を楽しめる境遇にな

り得たら、ゴルフも続け謡も復活させたい。それ迄にゴルフもせめて謡程度まで上達しておきたいものと思う。趣味は何かと聞かれたら矢張り謡曲とゴルフと答えたい。

次のバトンは南盛雄氏にお願いしたい。

# 学生謡曲への郷愁

昭和二十八年卒（旧・23）

石田輝夫

輝かしい昭和四十年の元旦の朝、ぶあつい年賀ハガキの束の中に一通茶色の封筒を発見し、さて何とご丁重な年賀封書と中を正すと風韻会編集子よりの「リレー随想」原稿ご依頼という始末。大へんご無沙汰しているのにどういう風の吹き廻しか、今年は内外公私ともに色んな意味で大へんな年であるとは考えていたが元旦早々大当りとペンをとった次第である。

「光陰矢の如し」の例えの様に六甲台を巣立ってはや十二年目、学生気分も抜けきれぬうちに、家では一男一女の良きパパとして、又社会ではナショナルのマークでおなじみの松不電器の営業十年選手として重責にあえいでいる始末である。

それにつけても、六甲台で一心に謡を習っていた頃が懐しく、大学祭に滝野兄らと講堂で「小袖曽我」を熱演し足をしびらせたのも去年の事の様である。

私どもの在学中は（昭和二十二年〜二十八年）戦後の経済混乱と思想的遍歴の渦中にあり、又年令的にも一番激動の期間であり色々な印象・思い出が多い。然も予科在学中に父を失い、生活か学業かという羽目に立たされたつらい日々からの逃避がはからずも謡曲であった。学部在学の三年間、アルバイトと学業の合間の謡は全く精神的支えとして大きな使命をはたしてくれたものと感謝している。

あの頃の謡は全く直剣で趣味という様な生やさしいものではなかったと考える。宇治先生の厳しい指導、上原先輩並びに保坂君の親切な指導に助けられて、自分自身を全く謡に打込む事が出来、精神的にも肉体的にも悩み解消の手段として大いに役立ったと考えている。

親父の形見の着物と袴を風呂敷に包み、湊川神社、大阪の大槻、波多野能楽堂へ出かけて行き、地謡からはじまって役に到るまで、色々の会に出させてもらったものである。この会の前の練習も厳しさをきわめ、しまいには声が少なくなった事も再々であった。又当時始まった民放の神戸放送から「猩々」の放送を行ったのも私共の思い出深いものである。

然し何といっても足のしびれだけは未だにぞっとする。学生集会所の畳の上ではまだしも能楽堂でしかも大勢の観客の前で一心に謡上げ、キリに近ずいてくるとこの恐怖が絶えずおそって来る。一人立てずに前でやきもきするが何とも出来ず、死ぬ思いではい込んだ事もあった。従って大学の講堂でやった時には終ると同時に幕を下してもらいやれやれと足を伸ばしてからひっこんだものである。

松下電器に入社してからも何とかこの趣味を続けたいと願っていた所、寮監先生に大へん謡の上手な人が居り、この人を中心に空虚な独身寮の夜を謡の練習で過し、春秋の社内謡曲大会にも毎回出場し、良い気持で謡ったが、何といっても学生時代と違いチームワークがとりにくく、シテとワキとが飛びはなれる事が多かった。寮生活の三年間はそうは言っても謡と非常に密接であり、学生時代を金とするならばこの時代は銀の時代であると言えよう。謡曲本も十五番程上げている。

それ以後、営業担当の常として、転勤に次ぐ転勤、しかも電化ブームいよいよたけなわとなり、次第に謡から遠ざかりはじめたが、忙中に閑を見出さんと再び志を堅め八木康夫先生の門下となり二年を過した。然しこの頃には会社の方でも役職がつき、又労組の役員という激職に身を投じていた為、一週間一度のお稽古もぬけがちになり会の前によく一夜漬の稽古をして頂いたものである。言うなればこの時代は銅の時代であった。

この時代に忘れられぬ事は大阪能楽堂で会があり、隈田川の役をもらい、新婚六ヶ月の新妻の見まもるうちに晴れの舞台を踏んだのは良かったが、学生時代同様足がしびれて立てなくなり、一人だけ舞台に残ってしまい、やっと立って入ろうとした所、引戸が内からしめられてしまいノックしてあけてもらう始末であり、冷汗びっしょりで早々に着がえて帰ってしまった事もある。それ以降会には一切妻を伴う事は止めにした。

そのうち子供が出来、家で練習が出来なくなるし、又転勤という事で、現在では仕舞扇子にナフタリンの臭いがしみこんでいる。

再々神大風韻会から催の案内状を頂くが、全くのご無沙汰で申訳なく思っている。これはウィークディーが多いのと、やはり練習していない為のおっくうな気持からであろう。

ご承知の方も多いと思うが、松下電器では今年四月から完全週五日制を実施する事になり、現在週二日の休日を各自如何に有効に過すべきかを全社をあげて検討している。週六日でも足りないと思っているのに、更に一日短縮すると、五日当りの仕事量は膨大なものとなり、特に私共営業マンの精神的疲労は増大する。

この精神的疲労回復の為にも週二日の休日の内の一日は健全なリクリエーションを行わねばならぬと考えている。再び謡曲の金の時代は復活する事であろう。私共はこの週休二日を勉強と健全な趣味で過し、激動する流通革命に勝ち抜く気力と技術をマスターし、且つ人格の陶冶に努めたいと考えている。学生時代同様謡曲に一心にうちこめる日が待ち遠しいものである。

思いつくままに断片的な思い出話しとなったが、お許し願い度い。

次のバトンは兄弟子とも言うべき和田慎三兄にお願いしたい。

## 随想 その③

# 「花は心」
## ——風姿花伝より——

昭和十七年卒（旧・十二）
伊藤欣二

幹事から「先輩消息欄」への寄稿を依頼されたが、その意味をも含めて次の様な原稿を試みた。これは少しでも謡曲をやることの意義を同感して貰えたらとの気持から書いたものである。

世阿弥元清の心の基礎は道元の法系をひく禅であるという。併しこの禅をふまえて能の生命をいみじくも「花」と表現するところ、まことに日本文化と言いたい。

一見戦前と戦後とに日本文化は断絶されたかの様である。併し戦後早や二十年を閲した現在改めてまことの日本文化を顧みるべきではなかろうか。世界的に普遍的な文化はあって然るべきである。併し同時に固有の風土に培われた個性的な日本文化は日本の存立意義であろう。之こそは日本のこころと言うべきものであろう。能こそは、「花」こそはその真髄であると思う。

日本の芸術は単に素人が玄人を鑑賞するに止まるものではない。「和歌、俳句、長唄、浄瑠璃、謡曲、あるいは能楽、歌舞伎は……一つは『芸能』である。専門家は……素人から追ひ追ひ生まれ出てくる。……玄人と素人とをはっきりけじめ立てる点は、この芸を職業として世すぎのすべとしているか否かである。……みずからやってみてはじめてその妙味がわかるという芸なのである。……門外漢には無縁の境地であるかもしれない。しかしその中にはいると、芸はひたすらに繊細をもとめ、妙境に入ろうとする。……身を投じてその徒弟となって師事しなければならない。」（佐野一彦「永遠の回帰」）

能の社会的意義について世阿弥は言う。「抑芸能とは、諸人の心を和げて、上下の感をなさむ事、寿福増長の基、避齢延年の法なるべし。」しかし「道のためのたしなみには、寿福増長あるべし。寿福増長のためのたしなみには、道まさに廃るべし。道廃らば、寿福おのから滅すべし。」

「まことの花は、咲く道理も散る道理も、心のままなるべし。されば、久しかるべし。」

（四〇・一・三〇）

### 御寄付のお願い

ここに「風韻」第五号をお送り致します。

さて、現在の風韻会の財政状態は非常に逼迫しており、通常の活動の持続が手一杯という有様です。また今年は、本学が三大学交歓謡会の当番校にあたる関係上、財政上の困難が予想されます。つきましては、誠に僭越とは存じますが、雑誌発行関係費及び、風韻会活動助成として、一口千円の御寄附を御願いしたく存じます。

同封の振替用紙を御利用の上、できるだけ多数口御送付下さる様御願い申上げます。

先輩各位

神戸大学風韻会



# 走馬燈

桜が霞と競い、白百合が薫香を放ち、菊の移り香の去る頃、生田の森に箙の梅が若木を彩り、やがて六甲台の桜の蕾が綻びると一年が過ぎ去る。そして今年も風韻会から七名が己が道を求めて社会へ巣立つのである。

四年間の大学生活また風韻会生活の思い出は果てることなく彼等の胸中を、走馬燈の影絵の如く駆けめぐっていることでしょう。

## 思い出すこと

（B）戸次威左武

大学生活の大半を風韻会で過した僕にとって、風韻会はこの上もなく良いクラブだった。良き先生、良き先輩、良き同輩、良き後輩に恵まれたのはもちろんであるが。そこには謡う楽しさ、舞う楽しさ、見る楽しさがあった。そしてこれらの楽しさを僕はこの四年間で思う存分楽しむことが出来たと思っている。姫路時代のありったけの声を張り上げて日々のうっ憤を晴らす楽しさ、シニアへ上がってからの宇治先生の発声に少しでも近づけた時の喜び、シテや地頭をして思うように謡えた時の嬉しさ。中でも一番印象深かったのは三大学合同謡会で大江山の地頭をした時である。まるで本当に大江山へ鬼退治に行くような意気込みで東京へ乗り込んで行って、みごと立派に退治出来たと思った。しかしその晩無性に寂しかった。精一杯謡えたのは嬉しかったが、僕がどんなに頑張ってみても、この程度しか謡えないのかと思うと無性に寂しかった。少しオーバーかもしれないが、そこに一生かかっても極めることの出来ない花を目指して日夜努力される能謡師の苦悩にも似た芸術の厳しさを感じたような気がした。

僕が初めて能舞台に上がったのは、三年生の学連春季大会であった。舞の順番を待つ間目前に開けたあのぴかぴか光った舞台を見詰めていると、波一つない琵琶湖をじっと眺めている時にも似た静けさを感じた。そしてその上で舞った爽快さはまた格別だった。舞台に命をかけ、舞台の上でその命を絶つのを本望としている人々の気持が分かるように思えた。仕舞での一番嬉しかった思い出は、やはり舞囃子に出してもらったことだろう。背後からのみやびで優雅な囃子は舞台をきらびやかな御殿にし、左後方からの宇治先生ののやわらかな声を中心とする同僚たちの謡は、御殿にさわやかな霊

気を吹き込んで下さった。その御殿で僕はその霊気に酔ったかのような夢心地で舞った。十三回生の中で僕だけがこんなにすばらしい経験をさせてもらったのは何か済まない気がする。これからは出来るだけ多くの人に舞って頂きたいと思う。

能を見初めたのも三年生の時からであるが、もう四十番近くなる。その中でも最初に見た喜之さんの「熊野」は印象的だった。「わらわお酌に参り候べし」とシテ座からワキへすべるように酌に行った、軽々とした身のこなし、足運びのきれいさ、それに扇をかざした時の真珠のように美しかった手は今でも覚えている。又国際会館で見た元正さんの「井筒」の姿の美しさに打たれて、下宿まですり足で帰った、など良い思い出である。

もう一つ忘れてはならない思い出は、三、四年生二回のコンクールである。とにかく宇治先生が熱心に指導して下さった。僕等がどんなに熱心になっても、なお先生の方が熱心だった。先生が「謡が良くなればその人の生活が変わる。」と言われたが、楠町の練習場で、何回直されても出来なくて、先生に睨まれた時、僕は僕の生活の角々まで見通されたような畏れを感じた。それで早速下宿に帰り、部屋じゅうを掃除し、計画を立て直した。しかし結局先生の謡をマスターすることが出来ず、生活に何の変化もなく終ったことは残念だった。その人の性格や生活が謡に現われるのは確かだと思う。これからは謡によって変えることの出来なかった生活そのものを変えることによって、謡を進歩させたいと思っている。

# 「人」の無限性

(E) 段野治雄

四年間の大学生活の中に、三つの所属する集団があった。ひとつは言うまでもなく風韻会であり、他はゼミナール、そしてロマン・ロランの下に集うグループだった。これら三つは夫々鼎の足の様に僕を支えてくれた。

ゼミナールが単に寄せ集めの冷やかなものにとどまらなかったのは嬉しいことだった。読書会をはじめ二度の合宿、二度の調査活動・二度の旅行そして種々の名目のコンパ……この様な集団行動をとり親密な関係を持てたのも、一つにはゼミ生の学問対象が国際経済学の名の下に低開発国問題、経済統合、関税一括引下げ問題、日本貿易問題等の様に夫々密接な係り合いのあるテーマであり、それ故に共通の学問基盤を互いに意識し合えたからであると思っている。そしてゼミでは、過去及び現在の生活環境の相異こそあれ、各々が同じ様に世界への飛躍に胸ふくらませている若い躍動する力を、学問を通じて感ずることができた。

ロマン・ロラン友の会は、名の通りロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の諸著作から彼の生き方思想に感銘し又考えさせられた連中の、それも指折り数えられるほどの少人数のグループだった。このグループではロランに、この世界に生きぬこうと努力している「仲間」としての地位が与えられていた。集いに於てはむづかしい議論は無用だった。生きることに真摯であること、よく熟慮することだけが要求された。時には旧御影学舎の味気ない物理の実験室で、時には元町の喫茶店で、ベートーベンをバック・ミュージックに語り合った。物言いたくなければ何も言わなくていい。一方苦悩や喜びを全て吐き出す。この会は僕にとって慰めの場でありそして何よりも力の源泉だった。そして友が己が立場をしっかりと見つめ何んとかして生き抜こうとしている姿の中に、一面で脆弱なしかし雄々しい精神を持つ人間というものを知った。

そして風韻会ではどうだったか。僕にとって二つの大きな意味があった。まず第一には、謡をはじめることによって初めて能楽に接し得たということである。凡そ音楽や絵画・彫刻・舞踏といった類のものを理解できない自分であったのに自ら謡をやり能を見る気になったのだが、そのはじめの意図が自己逃避として何かそれまでの生活と別のものをがむしゃらに求めんとしたところにあったにしても、それを今日まで続けることにより能楽の世界が目の前に開けられたのは十分に意義のあることであった。今まで既に少なからぬ数の能を観ている。然し実際のところわからない。僅か一・二番、見終えたあとえも言えぬ満ち足りた心持になったことがあるのと、仕舞を見ている時何かしら威圧的な力を感ずることがあった位のものである。だがそれだけで十分だ。自分にわからないが何かしらの世界がある、それを芸術と言おうか美の世界と言おうか、そういう人を魅惑する世界がある、ということをかなりの確かさをもって信ずることが出来るのである。

そして第二には、その様なものを求めて苦しみ努力している人が居ることの認識である。三年・四年と二年間クラブ生活を共にする間に友の中にその様な心をしみじみと感じた。そんな時自然と頭の下がる思いがする。友は皆、お前は買被っている、というかも知れない。だがそうでなくて一体どうしてクラブの活動・運営に友等の固い結束がなされ得ただろうか。

大学四年間は貴重な年月だった。過去を顧る時自ら責めさいなまれる気持だが、現在及び将来を思う時僕は近年になく満ち足りた心持でいる。前述の様な経験から「人」と言うものの無限を知り、その良さを噛締める思いがする。愈々学生生活を終え実社会で自立してゆくのだが、その中で僕は更に深く広く「人」を知りたいと思う。良い面ばかりでないだろうが、そのことはヨリ一層強く人間の良さを認識させてくれることだろう。もしそうならないときは、それは僕の自滅の時である。決してそうはならないだろう。

最後に、色々お世話になった宇治先生をはじめ諸先生並びに先輩の方々に深く御礼申し上げます。そして同輩の皆さんには、努力の足らなさから常に足手まといになったにも拘らずよくして下さったことに感謝せずにはおられません。又後輩の皆さんには先輩としての責務を何一つ充分に果せなかったことをおわびする次第です。

# みみずのたわごと

(B) 近藤哲久

カチャカチャ、ズルズル——碁石の音、うどんを啜る音、そんな

騒音とタバコの煙が充満した姫路分校生協の二階に、一組の正座した男達を発見し、その中に何の臆面もなく入り込んだのが私の風韻会生活の第一歩であった。

無我夢中でドナリ散らした（？）ジュニアー時代、謡曲そのものに興味を覚え、能の計算し尽された美しさに引きつけられた三年生時代そして芸術の深さ、厳しさに直面している現在――かくして、四年間の風韻会生活も終ろうとしている。

〃歳月人を待たず〃とは古人の嘆き。この様に流れた四年間の大学生活を顧る時、自分が歳月に置き去りにされたとは決して思わない。浪人時代に心に深く刻み込まれた「大切なのは結果ではなく、そこに致るまでの努力である」という生活態度を自分なりに貫き通せた事は、何にもまして得がたいものだと考えている。

幹事長の重責を与えられた時、諸先輩の残された伝統を引継ぎつつ、歴史の流れの中に新しいものをつけ加えることが自分達に果された使命であると考えると、余りの前途遼遠さに戸惑いすら感じたのであった。しかし、その使命の重大さの自覚と同輩の熱するが如き結束によって、風韻会の目標を再確認しつつ直面する問題に我々のベストを尽したのであった。私が忘れ得ないのは、この一年間に充実した同輩間のチーム・ワークであり、その中に個人的にも適切な助言を与えてくれる友を得たことである。諸活動に積極的に参加する中に生まれる人間関係こそサークルにとって欠く事のできない条件なのであり、単に人間関係の為の活動はサロン的空気を作るものであり、苟くも大学のサークル活動としては本末転倒と言うべきではなかろうか。

とにかく幹事長としての仕事を通じて、自分の正しいと信じることを貫くことに何如に大きな勇気と決断が必要であるかを孰と感じ、それを一層深くしたのは最高学年となった時であろうか。

コンクール出場者の人選を契機に表面化した三年生・四年生の意見の対立は、あたかも国会に於ける野党・与党のそれであり、決して建設的な対立とは言えなかったのは残念だった。反面、これを機会に両学年の話し合いも進み、コンクール前には一体となって活動に参加した事は意義があった。ここに痛感されたのは、日頃からの意志疎通――サークル活動に関する意見交換の必要性であった。

サークルに於て、更にまた社会生活に於て人間が接触している限り、そこに何らかの形で意見の撞着が生じるのは当然である。しかしそれを新しい方向に止揚させる事こそ困難ではあるが大切な事ではないかと思う。

風韻会こそ私の眼を能に向けさせ、自分なりにその美を観賞し得るまでにさせ、「増女」の深い愛を含んだ眼とモナリザの如き口元に完成された女性像を見い出し、涙にうるんだ眼――そこに女性の別の美しさがあるが、「泥眼」こそ、その美しさを最高の芸術にまで高めたものと見ているのであるが、どうだろう。

一つ一つの思い出は胸に深く納め、ここでは四年間の生活を反省し、一介の社会人として激動する社会の第一線に出発するに際しての心の準備とし、また後輩諸君に前車の轍を避けて前進する為に少しでも役立てば幸いだと思っている。

最後にこれまで御指導頂いた宇治師範を始め、諸先生方にお礼を申し上げると共に、十三回生諸氏の協力を感謝し、併せて後輩諸君の御活躍を期待しております。

―1965 3.1―



# 千波万波

（E）武田良弘

時間とは実に恐ろしい魔術使いである。私も早や卒業を目前に控える身になってしまった。風韻会生活四年間の出来事が次から次へと脳裡に押し寄せてくる。この間の心境の変化には我ながら驚嘆している。こし方を振り返ってみると、経路は奇しくも当世代の表街道をことさら避けて、熱血の男児が踏まざる未踏のハイキングコースを選んだ感があった。元来、私は五肢を激しく動かすことを信条とし、高校時代にはスポーツサークルに入っていた。大学に入るとこの信条に適った文化サークルを、しかも日本の伝統的精神を継承しているサークルを探選している内、念頭に浮んだのが今はなき詩吟部であった。生協の二階へ、これを求めて上ると、私を待伏していたのは、朗々とした先輩のボリウムのある謡曲であった。入部当初私は極度の足の圧迫、これは自分の信条に反するし、痒笑が込上げてくる。又友人に誇らしげに風韻会に入っていることを公然と言いえないこと。これが相重って練習を自ら進んで逃がれていた。この様な積極的逃避する己にとって謡いが上達する様子も当然なかった。併し、二年の連休を利用しての和辻哲郎の文筆に魅せられ古寺巡礼。そこでみた優美且つ神秘は盲目の面、上瞼から眉間に寄せた筋力によって引き吊られた激しい線に力強い気迫を漂わせている面、鼻の扁平な相好を崩して満面に笑みを浮べ、ストレスも一却に吹き飛ばしてしまう面に魅せられている内、急に激しく郷愁にかられ、これらの面の実際の動的姿を鑑賞したかった。この頃から次第に能楽のリズムに対する関心も深まり、練習も楽しげになり出したのである。その後、これに拍車をかけたのは、初参加の吉野での合宿に於る先輩との人間的接触であった。単に文化クラブに止まらず、文化論、人生論、恋愛論等に夜遅く迄議論に舌辞鋭く展開しているのに対し実に良きサークルだと再認識すると共に、自己満足と同時に誇らしげにこれこそ大学のサークルとしての真の姿であると感じる心境の変化が生じた。この点今日の女子部員が漸増している為か、何かサロン的雰囲気に陥り、次第にこれらの良き点が遺産と化しつつあるのは至極残念に感じる。六甲に進むと時間的束縛との激しい戦いの連続であった。併し、反面、そこから得たものは大きく、日々スケジュールがびっしりと詰り充実のある生活を送りえた点、今やなつかしく嬉しく自己の限界を試練し得た。私の好きな曲目は修羅物の如き力強い謡いである。それが私の性分にも合致していた。そこに登場する人物の状況に応じての沈着な指揮、統率力に深く感動するという副産物を得られた。

俗に「三ざる」と言われている「見ざる。言わざる。聞かざる。」のうち上部二点については度々の能の鑑賞、諸々の謡会にて漸次解決されたが、今の私にとって第三番目の聞く方は未だ得心の行く所に迄至っていず今後はこの方の是正に努めたく思う。

三年後半からの風韻会生活はサークル活動として実に充実した生活であった。良き先輩、同輩の友愛に恵まれたが、欲を言えば少々残念なことに、余りにサークルの運営に没頭し過ぎ、その面にのみ

団結し過ぎ、折角日本の最高芸術たる能に接する機会を持ち合せながら謡い方の技術のみを我武者羅に練り、それらに潜在する精神的なもの、芸術性についての突込んだ討論が少な過ぎ、青春の感激に涙する所が少々欠けていたことである。勿論、クラブの運営自体が一大転換点に立っていることを考えれば望むのが無理であったかもしれなかっただろう。今後は風韻会が単なる文化クラブに止まらず互いを諸面に亘って緊密に結びつけるに役立つ充実したサークルに進展、大なる飛躍を達成されんことを後輩の諸君に厚かましいが健闘されんことを期待しています。

余すところ僅かの日数をもって、愈々私も一介の社会人と化するが、今後も出来る限り機会を創り出し謡い を続けようと思っている。好趣味は人生の至宝であると言われている、社会の風潮に溺れることなく風韻会活動を通して得た情熱、共同的人間関係を人生の伴侶とし、後々迄心の何処かに永く謡本と共に蔵したく思う。

—1965.2.24—

## 「俺はどこへ行くんだ」

（E） 黒田昌吾

思えば私はこれ迄実に良き師に恵まれて来たと思う。そしてこれら先生方の殆どからクラブ活動に於ても熱心な指導を受けた。とりわけ思い出されるのは中学時代当時非常に内向的であった私にクラブ活動を奨められ、私の眼を開いて下さった先生である。三年間の長きにわたって私のクラス担任であったその先生には公私にわたり随分お世話になった。その先生の口癖であった「一人の喜びがみんなの喜びとなり、一人の悲しみがみんなの悲しみとなる社会」という言葉を今も懐しく思い出す。かくてこの時代には学校新聞部、軟庭部を中心に、実に純粋な気持の下に巾広い活動を行った。この経験は私にクラブ活動の意義を強く印象づけ、以後の私の学生生活を方向づけたといえる。

然し、高校生となるや受験生活への適応の中で、テニスを断念し新聞部活動の中で細々ながらクラブ活動に対する情熱を温めねばならなくなった。受験勉強の過程に於ても、又クラブ活動に於ても、得るところは勿論あったけれども、その根底にある情熱の強さ、純粋さに於て中学時代の比ではなかった。然しこの様な中に於ても部顧問の先生の師恩は忘れられない。

大学生活もやはり新聞会と軟庭同好会に所属する中に始まった。然し当時の消極的な態度の結果、新聞会には凡ゆる面でついて行けなくなり、軟庭も趣味として楽しむに過ぎなかった。斯様にして大学一年は過ぎた。自分で十分考え、積極性を保っておれば、今の私とは相当違った人間がここに居るかも知れない。このことは今更ながら日々の生活の充実への努力の重要性を認識させる。それを怠る時は「俺はどこへ行くんだ」ということになりかねない。

この様な大学二年目の或る日、「お前の声は謡曲向きの声や」とおだて上げて私を部室に引張り込んだのが金子君である。かくて私の風韻会での生活が始まる。然し、御影分校生として金子君と二人



きりであった関係上、専門課程に上る迄私にはサークル意識はなかった。又専門課程に入ってからも教養課程時代の目標のない無気力な生活を反省し、一時は少々期するところあって退部寸前迄風韻会には疎遠になったこともある。従って実に短い風韻会生活であった訳で、真にサークル活動への参加は幹事学年である三年生以降ということになる。然し色々の思い出が次々去来して尽きぬのは、この期間に於ける生活の有意義であったことを示す一つの証拠であろうと思う。

風韻会のサークルとしての向上を目指す努力の中で、同輩間の固い結束が生れた事は一つの大きな収穫であった。殊に高知での春季合宿に於ける思い出は今思っても顔がほころぶ。この頃のことである、このサークルに対する愛着や謡曲の面白味を本当に覚え出したのは。ようやくここで、サークル活動の意義を再認識し得る場を見出したといえる。然しその時には既に四年への進級が目前に控えていた。

謡については馬力にまかせて蛮声を張上げ通した。地声の大きいのを頼りに「それ青陽の……」とどなり、井上先輩に威勢良しと誉められて悦に入った最初の練習。夜のひととき、マージャンなる冥想ゲームを楽しむ四年生の傍で大声を放ち久下先輩に迷惑がられた最初の合宿。近くでは余り叫び過ぎてのどを傷めて弱り切ったコンクールの練習等々。この様に随分のどには腕白をしかけたが、現在少し分別づいて来たらしい。また謡のフィーリングを把握し、それを表現せんと努めうる様にもなった。

入部当時を思えば、既述の如くいわば遇々入ったこの風韻会でも良き師を得たことは本当に幸運であった。個人的にも指導して戴く機会を得て先生に接し、芸術に於ける厳しさや物事に対する態度、考え方を幾分か自分の血とし肉とし得たことは風韻会活動での最大の収穫であった。

それにしても謡とは何と面白いものであろうか。自分の謡は自分の鏡である。そこには自分の姿がよく映っている。自分の限界がよく分る。そして自分の中で、自分の限界の範囲で結局は勝負せねばならぬということも了解出来る。実に面白く、教えられる事が多々あった。

以上これ迄の自分をまとめる積りで思いつくままに書き連ねた。社会人として立つ日を目前に控えた今、これ迄の貧しい経験から、以後の方針として積極的態度を最も尊んで行きたい。

—1965.3.2—

## 神戸大学と風韻会

（E） 金子智一

私達の過去四年間の神戸大学は変動期であったといえます。といいますのも六甲台を中心にして、たこの足大学であった神大が統合化される過程に私達の神大生としての学生期間があったからに外ありません。

私は風韻会に二年生の春に入部し、約二年間ほどクラブにて活動しましたが、風韻会もこの神戸大学の統合化の中で、一年毎、クラブ活動の運営方法、又その雰囲気が変化していきました。私が二年生の時、即ち入部した時には風韻会は三、四年生中心の、しかも六甲三学部の学生が主な構成員でした。然しその後御影分校の六甲台移転、又その後の教養部設置に伴って一年生より四年生までの連続したサークルになると共に、女性も入部し、楽しいサークルとなって参りました。

私はこの過程の風韻会にて、約二年間でしたが、大学の場において謡曲を楽しみ、行って来たことを喜んでいます。私達が日本の古典芸術を理解し、親しむことが現時点において必要な事だと自分なりに思っています。私には然し未だに謡曲の楽しさそして芸術としての素晴しさを十分理解しておりません。謡曲、能の素晴しさを発見し、理解することが風韻会に於て謡曲をたしなんだ者としての卒後の務めだと思い、努力する積りです。どれだけ出来るかわかりませんが。

最後に、私は神大の発展、それに伴う風韻会の隆盛を期待しております。

× × ×　× × ×
× × ×　× × ×
× × ×　× × ×
× × ×　× × ×
× × ×　× × ×
× × ×

## 昭和三十八年度風韻会活動総括

# 風韻会の有機的一体化を

姫路分校の鶴甲移転によって、一応神戸大学は六甲台に集結した。これによって風韻会も全学年が一体となって活動し得ることになった。したがってその活動には従来以上に計画性が要求される。三十九年度はその意味で風韻会にとっては最初の試練の年であり、難問の多い中を試行錯誤的に解決へと努力した。

風韻会の一体化に伴う会員数の増加傾向の中で、まず問題となるのは会員相互の結びつきが弱くなることであるが、これに対して全会員が楽しく溶け込める雰囲気をもり上げることに留意した。

次に一定の目的を持つ自主的集団として、規律の必要性が今年度の活動を通じて痛感され、また会員のサークル意識・連帯意識が極めて低い段階にあることを、折に触れ指摘した。会員一人一人の反省を促し、全員が協力して風韻会造りをしてゆきたいものである。

## 「唐様とかく三代目」

猩々三代目主人
（B・14）　大林治郎

〝売家と唐様でかく三代目〟奇しくも正にこの言葉が小生にぴったりのようである。今年度も大学祭において各サークルの模擬店が出店したが、風韻会も今年度で第三回目の「猩々」を開店した。小生日頃ガメツイと定評ある故というより文総委員という事で三代目店主に納ったわけである。小生のゼミは財務管理で正に理論と実践を身につけるわけで、小生にとっても勉強になると思い引受けた。さて、その目標利益であるが、前回までは赤字返済の為になにがなんでもという気迫が山本氏の風韻第四号〝猩々〟開店の記を読むと感じられた。しかるに今年度の場合、目標としてはテープレコーダ購入の資金とする事として、その為には一万五千円程純益がでれば上々と思っていた。今にして思えば小生のいかに認識が甘かったか

痛感されるのであるが山本氏が細かく原価計算を行い、その目標利益の為に販売高予想を厳しく分析させられていたのに対し、三代目の小生、世間並の三代目らしく親の暖簾と信用に頼ってこの細かな分析が甘かった所に、経営管理のまずさがあったと自己批判している。第一回目の打合せを「入船」で行った時小生は「のこってみたら利益あった位で、今回は部員の親睦を図ればよい」と言っていて何がなんでも儲けるという根性は生まれていなかった。何回かの模擬店会議において各サークルの営業品名が明らかになるにつれて、具体的な注意事項等が確認された。今年度は大学祭後夜祭において各模擬店のPRを行うように申合せがあり。当「猩々」のPRの為にいくつかのプラカードを作ることになった。小生はプラカードの作り方なんぞは全然知らず、弱っていたが平岩（P15）がいろいろ助言と行動を共にしてくれ市電六甲口近くの製材所までベニヤ板やタル木などを購入して帰ってきたが、今さら大学までの坂のきつい事を感じた。小生ある人にいわせれば、万能だといわれているのであるが、工作はおよそ苦手で釘もうまく打てぬ程でもっぱら一年生にヤレヤレとけしかけるだけであった。近藤（B13）黒田（E13）氏がいろいろとプラカードのうまい文句を考えてくれたが、近藤氏描く学生の姿はよく似た人物が風韻会にもいたようである。前夜祭当日四年の方が一人も見えなかったのは残念であったが、十五名程がデモストレーションに参加した。集合場所の神戸駅で小生はまつたくションボリしてしまった。というのは、前夜祭はデコレーションコンクールは初めてであるにもかかわらず、一年生のクラスにはかなり時間をかけたデコレーションが数多くみうけられ、「猩々」のPRのプラカードは本当にみすぼらしくかつぐのが恥しいような代物であった。他のサークル・クラスがこんなに立派とは思いもよらなかった。

しかしながら、作ったプラカードは小生らが精一杯やっただけに同じ風韻会の会員が、軽蔑の言葉をプラカードに浴びせられた時はこのプラカードがたまらなくいとおしかった。延々と続くデモの中で元町通りを行く風韻会に注意していないと見過されそうであった。ワンゲルや童研の歌声にくらべ風韻には歌う歌がないのも寂しかった。来年度からもつともつと前夜祭は盛んになるであろう。来年こそ風韻会々員の積極的姿勢をみせたいと思う。さて、本職の入船の御夫婦に助言してもらい且つ、前年度の山本氏の残されておかれた「ノート」を何回も読みかえして、今年度も前年度並に購入し又剌身はあまりうれないと判断して半分にへらした。一皿五十円の線はくずさずその内容は、小生は物価高の今日肉一本に野菜二本を強硬に主張した。（このころからだんだんガメツクなってきたのだが）それに対して「入船」のおじさんは毎年やることだから信用が大切といって従前通り肉二本、野菜一本で通すことになった。又前年度と同様ダイェーに行ってもらい一通りの備品を調達して、現在、いつでも串かつ屋ができるまでに内容充実した。山本氏と同じく「入船」にはしばしば相談したい事が持上って個人でいった事もあった。交渉費の名目で部から一度だしてもらったが、矢張り交渉費は最初に責任者に前払しておく方がよいのではないか、小生の場合酒にも弱いので金額はたいした事なかったが、酒豪の名高い小寺（E14）岸本（B14）らだったら、その負担額はかなりのものであ



ったであろう。小生もそれでもかなり腕を挙げたらしく、帰省して親どもをおどろかせた。それはともかくとして「入船」の御夫婦には何かとお世話になった。さて、「猩々」の屋台作りは絶好の日和に恵まれ黒川（T13）氏なども応援にきてくれ、渡辺（T15）等の活躍で作りあげる事ができた。

この時も小生は不器用である事をよくしっていたので側で黙々と手伝っただけであるが、うまく出来ていく骨組みに感心していた。ともかくも出来上りは一番洗練されていたと思う。当日、前売券の売り上げが四百枚程度で前年台をやつと上回る位で十二時開店頃は全然客がこずに売上箱で頑張る小寺、永江（E14）と顔をみあわせて心配していた。くらくなってくるに従って、客も集まり、売上は上昇して野菜類が足りなくなって追加注文に一年生に走ってもらったがここでも小生の経営者失格であるのだが、客の動きがつかめなかったことで、昼間あれ程売れたジュースが夜になったら全然なくなり又しばしばソース、タマネギとその度に一年生に走ってもらった事は、小生の責任で下手だったと思っている。当日の役割は、一応は部室に時間決でやったつもりであるが、予想したより人手がいり、結局やる人はずつとやってもらったままで悪かったと思う。黙々と串を後の方で洗ってくれた方々にはお礼を申し上げる。閉店まぎわになって、失態ともいうべき酩酊者が三、四名程出てしまった事である。特に一年生にとっては、何をやるべきか小生がよく徹底させなかった故に、その責任と仕事がわからず気分がゆるんでしまったと思う。又初めての大学祭であちこちの模擬店ものぞいてみたくなるだろうしそれをいたずらに強制、しかる事は、一年生の立場に理解がたりないと思われる。しかしながら、部員たる自覚があるべきであると思われる。そうすれば、己がどの程度まで飲めるかわかるではないだろうか。来年度からは、この経験をいかしてうまくやっていきたいものである。もう一言つけくわえれば、いわゆる態度が熱心でなかった者は一生懸命やっている者をみて、なんとも思わないのだろうか。この一文、第四代店主並びに店員に少しでも役立てば幸いである。

## 「猩々」収支決算表

| 収入 | 円 | 支出 | 円 |
|---|---|---|---|
| 前売券売上 | 21,600 | 材料費 | 55,940 |
| 現金売上 | 56,410 | 備品 | 2,750 |
| 助成金 | 6,000 | 屋台 | 930 |
| | | 焼料費 | 200 |
| | | 謝礼 | 3,000 |
| | | 雑費 | 2,210 |
| | | 純益 | 18,980 |
| 計 | 84,010 | 計 | 84,010 |

# 第十回学連
## コンクールを終えて

（E13）　黒田昌吾

昨年十二月十二日、大阪能楽会館に於て学連秋季大会が行われ、この中でコンクールも会場に漲る真剣な雰囲気の中に無事終了した。今回はコンクール十周年にあたり、連盟では課題曲を決めるなどの新企画の下でコンクールを、との声もあったが、結局形式は例年通りとなり、ただ審査員数の増加を見たのみであった。結果として神大風韻会は「安達原」で五位にとどまった。ちなみに上位入賞校を列挙すれば、第一位は関学の「船弁慶」、第二位は関大の「千手」、第三位は女学院の「菊慈童」、第四位は神商大の「羽衣」であった。

コンクールが従来とかくの非難を蒙りながらも多くの回を重ねて来たのは、種々の悪弊をもつ反面、それが練習活動に対してもつ刺激剤的な有意義性の認められるが故である。我々もこの意義を十分認め、コンクールでの発表迄の過程を出来る限り大切にしたいと心に決めた。又近年本学は下位に停迷して涙をのむこと再三、これに対しても我々十三回生の面々は期するところを持ち、十二月を目指して練習に励んだのである。

この過程での最初の困難は出場者の人選をめぐって現れた。四年生は全員で五名であるが、それは問題無しとして、三乃至五名の補充人員の人選が問題となった。三年生はクラブの結束を乱すとの理由から、三年生も全員出場か、さもなくば四年生のみに任すと主張したため、難行したが何回かの談合で了解点に達した。即ち、コンクールは原則として四年生のそれ迄に体得した成果の発表の場であり、人数不足は四年生の権限に於て三年生より人選を行い協力を得るということである。これは至極当り前のことではあるが、それに至る迄は少なからず論争があったのである。然し、これを契機として、三、四年生間の意思交換が促進されたことは、風韻会にとって有意義であった。それにしても、各学年の立場は各々異なりはすれ部活動への建設的な参加態度を常に保たねばならぬと思う。

この間、湖北は海津での夏季合宿、試験終了後の三日にわたるコンクール用合宿及び宝生会との学内合同謡会を経て、曲は「安達原」に決まり、出場者九名の人選も終った。これで本格的な練習への移行体勢は整った。ところが、その頃の練習は結局「うまくやらねば」的意識の過剰から抜け切れず、その結果我々の謡は小さな、とはいえまとまりもない学生謡曲らしからぬ情ないものになり下っていたと思われる。

この様な段階で、風韻会秋季大会（十一月七日）を迎えた。このコンパの席上、先生や先輩の言葉に「何くそ！」と発奮した我々十三回生連は、兎角我々の可能な範囲で最善を尽そうと誓いあった。その翌朝から毎朝八時半から十一時迄の真剣な練習がコンクール前



日まで続いた。然し、より良いものへの前進は容易ではなく、一時は四年生全員が相当ののどの変調をきたし、前途の多難を嘆じたこともあった。然し、宇治先生の熱心なる御指導の下にコンクール直前には謡も何とかまとまりもつき、コンクールに対する気持も整理され、精神的安定を得て大阪能楽会館へ勇躍乗り込んだのである。かくて、約一ヵ月の練習過程を経て到達し得たコンクール前の気持はこれに参加した者のみが同感しうるものである。而してそれが練習の最大の成果である。それを第三者的立場から、いかに評価しようと自由であり、従って我々にとって順位などはどうでもよかった。

舞台での我々は日頃の練習の成果を十分発揮して、実に無心に謡うことが出来た。謡い終えて控室に戻り、口々に「今日のは気持良かった」と顔を見合わせながら、泌々とその気の清々しい気分を味わったものである。それだけで十分であった。女学院の「菊慈童」は一応除外して、関学の「船弁慶」や関大の「千手」には、やはり絶対的水準に於て一目を置かねばならない。然し、もてる力を十分発揮しえたという点で我々の謡は少しもそれらに遅れをとらなかったと断言できる。

コンクールの成績発表後の沼先生の講評は例によって例の如し。この当日、若干名の先輩が応援に来られたが、他校との比較に急で「よくやった」という一言の与えられなかったのを残念に思う。せめてここに自画自讃しておく。末尾ながら、宇治先生の熱心なる御指導に対し心からの謝意を表したいと思う。ありがとう御座居ました。

# 幹事長就任にあたって

（J15）　尾島洋三

特にこれが抱負だといったものはありません。その場その場に応じて自分なりに納得のいく最善の努力を尽したいと考えます。

学舎統合に伴い、わが風韻会も本年を以て一応一年から四年迄全学の風韻会へと脱皮を終えることになります。しかしこれと同時に多くの問題も現われてくることでしょう。又、今迄よくいわれてきた問題――大学の文化サークルとしての風韻会のあり方、サークル員のサークル意識の欠如、活動のマンネリ化、活動目的及び方向性の欠如等々――も未だ完全に解決されたとはいえません。これらを全員一致協力で徐々に解決してゆくことを本年の課題と考えます。この意味で余り外部活動にふりまわされることなく、常に内部充実に心がけ、以後の礎石となしたいと思います。

次に一つだけ我々現役の戒めとして確認しておきたいことがあります。それは、ともかくも一度風韻会の一員となった以上、責任ある行動をして欲しいということです。風韻会に対してただ雰囲気が合わぬとか面白くないという様な、甘えた身勝手な態度をとることなどは言語道断。全ゆる問題に対して真剣に悩み、しかる後責任ある態度をとってほしい。「自己に厳しくあれ」、これだけを望みたいと思う。皆さんの御協力をお願いします。

# 風韻会のあしあと ――昭和39年度――

## 三月

一日（日）――七日（土）春季強化合宿
於高知市雪蹊寺
参加者三十三名一日七時間のハードトレーニングであったが、最終日にレクレーションを持ったことは有意義だった。前田先輩（E11）がはるばる来て下さったことには現役一同感謝感激。
練習曲目「吉野夫人」「紅葉狩」「賀茂」「羽衣」「天鼓」「忠度」「放下僧」「葵上」「熊野」以上九番。

二十日（金）風韻楽堂舞台開き
於宝塚宇治師範宅
宇治先生の舞台「風韻楽堂」がすっかりできあがった春ののどかな日に、現役十三名、先輩七氏が参加された。

二十二日（日）十二回生卒業歓送謡会
於六甲台学生集会所
春霞が立つのどかな日に、十二回生七名を送り出した。〔素謡10番、独吟1番〕宇治師範、藤井会長、古林、米花両顧問、西尾（旧5）藤（旧20）西野（新5）提（6）長尾（7）原（8）永田（9）浜本（11）植杉（浩）（11）形部（11）岡本（10）の十一名先輩出席。

## 四月

十一日（土）観能会
於湊川神社
「盛久」「采女」（宇治師範）「隅田川」「鞍馬天狗」（観世元昭）の四番。

## 五月

三日（日）三大学合同謡会
於東京杉並能楽堂
素謡「大江山」（シテ山本康之、ワキ岸本公男、ワキツレ三上薫永）。仕舞「杜若」（五十嵐勝三）「小袖曽我」（古家清子、杉岡八千代）「桜川」（砂見章子）「田村」（長谷川晴美）「屋島」（戸次威左武）。合同素謡「咸陽宮」（ワキツレ近藤哲久）。亀井

十日（日）宇治風韻会
於大槻能楽堂
有志二十五名参加、連吟「頼政」他。

十六日（土）大学祭文化サークル合同発表会
於六甲講堂
素謡「大江山」（シテ近藤哲久、ワキ武田良弘）。仕舞「杜若」（五十嵐勝三）「田村」（長谷川晴美）「桜川」（砂見章子）「小袖曽我」（古家清子、杉岡八千代）。十七日（日）園遊会模擬店「猩々」開店
於六甲台学舎前庭
今年度の成績は第三位であったが、一同はすっかり疲れてしまった。しかし一致団結する機会、サークル意識を持つのによい機会であった。

二十日（水）観能会
於大槻能楽堂
「景清」（大槻秀夫）。感銘深し、参加者二十四名。

## 六月

六日（土）関西学生能楽連盟春季大会
於上田観世会館
仕舞「田村」（戸次威左武）「芦刈」（武田良弘）「桜川」（近藤哲久）「紅葉狩」（黒田昌吾）「船弁慶」（段野治雄）。連吟「俊成忠度」。仕舞「田村」（長谷川晴美）「吉野夫人」（古家清子）「熊野」（岡田純子）「小督」（杉岡八千代）。

十四日（日）四大学（神大、甲南大、商大、神戸女子薬大）交歓謡会
於神戸女子薬科大学
例年の女子薬科大学との交歓会が四大学交歓会として発展、素謡「春日竜神」。仕舞「杜若」「屋島」「小袖曽我」「羽衣」「葵上」「桜川」。

終了後ミーティングを持ち、他大学の実状を知ることが出来て参考になった。

二十一日（日）都留好子先生謝恩謡大会
於姫路本城能楽堂
素謡、仕舞、連吟。先生仕舞「高砂」。参加人員現役四十三名。原（9）永田（10）前田（11）森沢（11）植松浩（11）大良（12）山本（12）佐々木（12）有田（12）の九先輩、好諷会より二十名の賛助を得た。詳しくは別掲囲込み記事参照。

## 七月

四日（土）ジュニア祭
於鶴甲学舎
素謡「土蜘蛛」（シテ渡辺通昭、ワキ植田勝弘、頼光安藤幸雄、胡蝶浅瑛子、ワキツレ内海隆彦）。仕舞「鶴亀」（岩崎勝至）「紅葉狩」（戸田美代子）「熊野」（角田充子）「春栄」（吉田健一）

十一日（土）――十三日（月）リーダー・トレーニング
於芦屋Y・H
大林（B14）楠田（E14）二名参加

## 八月

二十四日（月）――三十一日（日）夏季強化合宿

於滋賀県海津天神社

参加者四十五名。先輩前田（11）森沢（11）大良（12）山本（12）佐々木（12）の諸氏参加。

練習曲目「紅葉狩」「竹生島」「吉野夫人」「羽衣」「賀茂」「大江山」「安達原」「三井寺」「頼政」以上九番。

技術向上と会員相互の親睦の効果をあげた。

## 十月

十七日（土）――十九日（月）コンクール用合宿

於六甲台部室

曲目「安達原」「敦盛」。試験のための練習不足をとりかえすべく三、四年生全員が参加した。

三十一日（土）大阪市立大学祭賛助出演

於山本能楽堂

仕舞「高砂」（五十嵐勝三）「敦盛」（戸次威左武）「葵上」（近藤哲久）「屋島」（黒田昌吾）。

## 十一月

四日（水）宝生会と合同発表会

於六甲講堂

舞囃子「敦盛」（戸次威左武）「班女」（砂見章子）。仕舞七番。連吟「安達原」。宇治師範仕舞「難波」。

この会の意図は学生に少しでも能に興味を持ってもらうことにあり、今後一般市民をも対象として行きたい。

七日（土）風韻会秋季大会

於六甲台集会所

素謡、連吟、仕舞。

宇治師範、藤井会長、荒川副会長、福光顧問、原（9）左鴻（10）前田（11）形部（11）佐々木（12）大良（12）先輩出席。

八日（日）文総運動会

於六甲台グランド

会員の一致団結精神欠如により成績は良くなかった。

十四日（土）観能会

於湊川神社

「小督」「花筐」「女郎花」「車僧」。

二十三日（日）宇治風韻会

於湊川能舞台

有志九名参加。藤井、荒川両顧問、左鴻（10）前田（11）先輩出席。

## 十二月

六日（土）観能会



於大槻能楽堂

「俊寛」「井筒」「天鼓」「紅葉狩」

十二日（土）関西学生能楽連盟秋季大会

於大阪能楽会館

コンクール曲「安達原」。連吟「富士太鼓」（シテ古家清子）。仕舞「鶴亀」（岩本悦郎）「田村」（岸本公男）「芦刈」（小寺満雄）「猩々」（永江幹雄）「竹生島」五十嵐勝三）「羽衣」（大林治郎）「熊野」（尾嶋洋三）「屋島」（黒田昌吾）「紅葉狩」（楠田美樹）。

二十日（日）謡納会

於学生集会所

なお本年度の練習曲目は次の通り。

「大江山」「頼政」「三井寺」「安達原」「井筒」「蟬丸」「春日竜神」「班女」「敦盛」「千手」以上十番は二、三、四年生。

「鶴亀」「土蜘蛛」「紅葉狩」「富士太鼓」「小袖曽我」「羽衣」「竹生島」「橋弁慶」「吉野夫人」「田村」以上十番は一年生。

### 三大学交歓謡会についてのお知らせ

恒例の本交歓会も第九回を迎え、今回は本学の主催の下に開催されることになりました。

期日も例の如く連休を利用して五月三日に、場所は湊川神社能舞台にて、と決定致しました。目下現役一同その日を目指して企画準備中であります。

今回は神戸にての開催ですので、多数の先輩の御参会を期待しております。現役の活躍振りを御覧戴くと共に、舞台にまた、大コンパに興じてお楽しみ下さい。

なお先輩連吟は「千手」となっております。その他の詳細は後日改めてお知らせ致します。

先輩各位

神戸大学風韻会

# 編集後記

◆いよいよわが神戸大学は六甲台に集結しこれにより風韻会も全学的サークルとしてその姿を整え、活動軌道に乗らんとの努力を本格的に始めました。多くの近辺の大学の謡曲サークルのリーダー格の人から、新人部員が非常に少くて困っている話をよく耳にします。風韻会は、その様な心配はどこ吹く風で、年を追っていよいよ量的には大きく発展しつつあります。この力は実に頼もしい限りであります。然し、大きくなればそれだけ解決すべき問題は増加し、かつ困難化することでしょう。これらの問題は既に前号に於て指摘された通りで、その解決への努力の中で又種々論議が興るでありましょう。

◆本誌もはや五号を数え、この号にも何らかの特色をもたせんとしましたが御覧の如くに落着いてしまいました。前号でのサークル論を更につきつめるには未だ時日浅しの感あり、これについては次号以下に期待したいと思います。という訳で今号の編集方針としては、当誌の、現役会員、卒業生会員の連絡稠密化の場としての意義を最も重視し、多数の先輩の御登場を、と企画致しました。然しそれを十分果せえなかったことを編集子一同お詫び致します。

◆風韻会は増々大きく成長しつつありますその中で本会が諸会員のもつ風韻豊かな気持に育まれて、より密なものへと充実するための一助としての力が、この会誌「風韻」に与えられんことを願うこと切であります。

◆最後に「風韻」第五号発行に際して種々御支援を賜わりました皆様に心から御礼申し上げます。

（黒田）

編集委員

近藤哲久
黒田昌吾
戸次威左武
武田良弘
段野治雄
五十嵐勝三

昭和四十年三月十三日印刷
昭和四十年三月十五日発行

発行所　神戸市灘区六甲台町
神戸大学風韻会

印刷所　大阪市城東区野江中ノ町一丁目二一
水三島紙工株式会社
電話大阪931―六七四八番